



明日佳グループ
札幌宮の沢脳神経外科病院
笹森 由美子 先生

1993年札幌医科大学卒業。
医学博士。日本脳神経外科学
会脳神経外科専門医

今回のドクターは

患者さんから「もの忘れが増えて認知症が心配です」と相談を受けることがあります。「TVに出ている芸能人の名前が出てこない」「物をどこにしまったか分からなくなった」「買い物に出かけて買い忘れたものがある」などのほとんどは、認知症の症状ではなく誰にでもあるもの忘れです。

認知症で「忘れてしまうこと」は、体験の一部ではなく体験そのものであることが特徴です。外食した飲食店の店名を思い出せないことは病的ではありませんが、外食したこと自体を忘れてしまったら認知症の可能性がありません。

「覚えられない」「思い出せない」が認知症の特徴的な症状と考えられがちですが、日常的にやっていたことができなくなること（遂行機能障害）や、無関心も認知症でよくみられる症状です。さらに「家事や整理整頓ができなくなる」「ニュースや時事問題に興味を示さない」「身だしなみ、服装に無頓着になる」「好きだった趣味や習い事をおくくがる」などは認知症の症状の可能性がありません。

アルツハイマー型認知症では、もの忘れがあることに対しての「取り繕い反応」も見られます。生活に支障をきたす場面があるにもかかわらず「普通にやっています」「困っていることはありません」と言い、答えが分からない質問に対しては「あれだよね」「何だっけ？」と配偶者などの家族に援助、同意を求めたりします。

レビー小体型認知症では「歩行が下手になる、転倒しやすい」「はっきりと清明なときとぼんやりしているときの差がある」「実際にはそこにはいない動物や人が見える（幻視）」「寝言で大声をあげたり寝ぼけたようになる」などの症状が目立ち、もの忘れの症状自体はあまり目立たないこともあります。

歩行状態が悪くなることや意欲の減退は加齢による生理的な変化でも見られ、認知症の症状との違いが分かりにくいことがあります。自身、ご家族の症状で心配なことがあれば、もの忘れ外来で相談されることをおすすめします。

認知症の症状について

あなたの街の
ドクターが
アドバイス



「覚えられない」「思い出せない」
以外にも多くの症状があります